

ジュインマは、売上の計算をしていて、細かい数字がどうしても合わないことにイラついていた。

「このくらしいの数字は大目に見てもらいたいもんだぜ」とついつぶやいてしまった。

アンガイン星は、ドラング銀河とジュランギ星系とのどちらにも近い位置にあり、亜空間フォーカスも合いやすい事から、安全なワープ航法の乗継星としてにぎわっていた。

ジュインマは、そのアンガインの首都から少し外れたロンマラ地域で宿屋の運営をまかされていた。

表だって宣伝はできないが、寝る場所の提供という事もさることながら、女の紹介と人気の麻薬「ヨンロビ」の提供もセットになっている。知る人は知る裏スポットなのだ。

しかし、表の宿屋としての帳簿と売春宿、トリップ部屋としての帳簿はキッチンと分ける、デンビドアの親方たちはうるさいのだ。

トントンと窓をたたたく音がして、顔をあげると、「ねえジューさん」と、女が受付カウンターに肘をつけてこつちを見ていた。この宿屋、「ロンマラ・ワイハイ」に出入りする娼婦のひとり、ヨヨミミだった。

「なんだよ、金の計算してんだ。邪魔しねえでくれ」

「何よ、『ベイラミの間』の照明が壊れてるって教えてあげにきただけじゃない。」

「え、またかよ」とジュインマは受付カウンターから後ろを振り返り脚立を取り出そうとした。

そのタイミングでヨヨミミは自分の長いスカートをまくりあげると、そこから小さな子供が玄関に向かってそっと走っていった。

「金はあわねえし、照明は壊れるし、めんどくせえ」とジュインマはフロントのカウンターから外に出た。

その金が合わないのも、照明が壊れるのも実はヨヨミミの仕業だった。

ワープの中継地点ということ以外にとりたてて大きな産業もないこの星。その中でも繁華街からはずれた、このロンマラ地域でも、このあたり一帯はもつとも治安が悪く、浮浪孤児のあふれる環境だった。

ヨヨミミもそれほど裕福ではないが、孤児たちはもつとひどい。だから彼らがホテルの金をほんの少しちよるまかして、あやうく逃げ場に困っている時は、時折助けてやっているのだ。

「あんまり同じネタじゃ隠しきれないからね。もうちよつといい方法考えんだよ」とヨヨミミは独り言のように、去っていく少年に告げるでもなくつぶやいた。

「いい方法」なんて、ここにはないんだよ。と本当は思いながら。

「なな、なんですって？ 宇宙警察？ はい？」と、ジュインマは「ベイラミの間」の照度調整ユニットを交換しながら、首からぶら下げた通信ユニットと話をしていた。

この忙しい時にいまましいとジュインマは対応していたのだが、話し相手のこのあたり一帯をとりしきる若頭ヨーマンズの口調があまりに切迫した雰囲気だったので、その雰囲気呑まれてしまった。

ヨーマンドによれば、宇宙警察のスパイが、このあたりにやってきている形跡があるのだそう。そして、そのスパイは、どういう仕組みだかよく分からないが、人の死体に潜り込んで重要な秘密を盗んで行くという事らしい。

「死体に潜り込む？ なんだそれは」とジュインマは変な話だと思ったが、どうも宇宙警察でも、かなり最新の技術で、このことを知っているのはデンビドアでも一番上の人間だけなんだそう。ヨーマンドからは、「自分の知り合いだからと安心するなよ」と念をおされた。

「なんだよ。知り合いって、こんな場末の宿じゃ毎日顔を合わせるのには娼婦たちくらいのもんだ。あいつら殺しても死なねえって」とジュインマは馬鹿馬鹿しく思った。まさか宇宙警察が人殺しもできねえだろうしな。とほとんど本気で話を聞いてはいなかった。

どうせ、こんな場末の宿なんだ。大したことは起こらないさ。本気でそう思っているのだった。

「とにかくだ、お前の身の回りの人間の最近の情報を裏取りしながら集める。本当は死んでるのに、生きてお前の宿に来てる奴がいるんだよ。これはハウオウさまより、まだ上の方からのご指示なんだ。下手うつんじやねえぞ」と、ヨーマンズの指示はジュインマの想

いとは真逆の真剣さだった。

「わかりやした。ちよつと娼婦たちの暮らし向きとか洗ってみやす」本音とはかなり異なる返事をするしかなく、ジュインマの口調は音が曲がったような言い方になった。

### 3

二時間後。ジュインマはフロント業務をスタッフのモイモイに任せてホテルを出、すぐ裏手にあるロミーヌ川の橋の下におりていた。

「これが、うちに入りしてる女たちの連絡先だ。ヨメスカ娼館からの紹介もあるから、そういうところの女はヨメスカんところへ行つて、うまいこと聞き出してくれや」と、ジュインマは、時折小遣い銭をやつては雑用を手伝わせているロモンチ少年に75ロムムーを手渡した。孤児出身のロモンチにはかなりの大金だ。

「ジューさま、これ、うちの仲間によつてもいいか？ 調べるの手伝わせるし」とロモンチは慣れない大金の使い方も分からず、ただ仲間にも分け前をやらねば、どう恨まれるかわからないという事だけが気がかりだった。

「おうよ。好きにしな。色々早めに分かった方が、こつちも助からあな」とジュインマは適当に答えた。ヨーマンドからは軍資金として2000ロムムー送られてきている。それらしい話が早めに手に入れば、残った金は自分のものだ。

話終えるとジュインマは河原から川沿いの道に戻り自分の職場である宿屋へ向かった。堤防から河原を見れば、ユーギンナの草や葉を使ったバラックがいくつも見える。亜

空間フォーカスが合いやすいアンガインは、軍事的にも抑えておきたい要所であり、この星域一帯で覇権を争っているトーキヌス連合とヤランチ王国の戦乱の場になる。停戦しては約束を反故にして攻撃が再開され、いつまでたっても、この星に平和は来ない。デンビドアにへつらって、怪しい宿のあずかり主人をやっているからこそ、なんとか食えているが、この立場がなくなったら、あのブラック生活に逆戻りだ。

ホテルの裏口から中に入ろうとすると、勝手口の石段の横に見かけた事のある子供が、痩せこけ、死にそうになって横たわっていた。それはヨヨミミに助けられた子供だったのだが、ジュインマには分からない。死にそうな孤児など、この星では道端にころがっているドワドワの実の抜け殻とさして変わらない。いちいち気にしているわけにはいかなかった。

とはいえ、ホテルの横で死体が出るのもやっかいだ。ジュインマは、

「おい、金が要るならロモンチんとこへ行きな。なんか仕事をくれるぜ」と子供の追っ払いもかねて教えてやった。熱でもあるのか、ふらふらの足取りで子供は河原の方へと向かった。

## 4

ジュインマにやる気がないのが見透かされたのか、ヨーマンドは、毎日通信ユニットを鳴らした。調査の仕方を問い詰め、いくら払ってるのかも聞きだしたうえに、「もう少し値上げしてやっていいから、徹底的に調べろ」という指示まで出た。結局孤児連中に35

0 ロンムーも支払い、動員している孤児の数も3倍以上に増えた。このあたりの孤児はこの仕事のおかげでずいぶんと潤ってきた。

しかし、最近「ベイラミの間」の照度調整ユニットが壊れないのが、この仕事のせいだとは、愚かなジュインマにはとんと分かってはいなかったのだが。

ヨーマンドによれば、デンビドアの上の方の盗聴スタッフが、その死体に潜り込む潜入捜査官は娼婦になっている可能性が高いと言っていたらしい。ヨンビロの入手経路を聞き出すのに、利用者と寝て、世間話のようにルートを確認して、販売所を割り出すという捜査方法で、かなりのルートがこれまでに潰されてきたのだそうだ。

「おいおい、ヨンビロがなかったらおまんまの食い上げだぜ」と、ここに来て、やつとジュインマもこのスパイ探しが自分の生活にみっちり関わっているのだと理解した。

ヨメスカ娼館から流れてくる臨時の女まで入れれば、調べる対象は四十人を超えていた。しかし、この3週間をかけて、女たちの住居や、その近辺の聞き込みを孤児たちにさせたが、どこかの娼婦が死んだという話は出て来なかった。

やっぱり女の中にそんなスパイが紛れ込んでいるなんて、考え過ぎなんじゃないか？ という空気が流れ始めた時、ひとつだけ、おかしい出来事が起きていることにジュインマは気が付いた。

最近ヨヨミミの顔を見ないのだ。ヨヨミミは器量は十人並だが、客扱いがうまかった。変態チックな客の要望も嫌がらずに受ける上に、妙にいつもカラッと明るくて特定のファンもけっこうついている。

だから指名の客も多いのだが、その指名を断るほどに出席率が悪いのだ。そのことをヨ

ーマンドに話すよ、

「そのヨヨミミとか言う女が来なくなった日の前後に、何か変わった様子はなかったか、孤児たちに調べさせろ」と、具体的な指示が出た。

調べて見ると、二週間ほど前に、ヨヨミミの常連客の中でも少々乱暴癖のある客がヨヨミミの自宅を教えろとフロントで大暴れしていた。モイモイにも聞いてみたが、確かに大声を出す客がいたようだ。

その後、ヨヨミミがその男をなだめすかして二人でホテルを出ていったのだが、その日を境に、ヨヨミミの出勤率がガクンと下がっているのだ。いつも明るい彼女が沈んだ調子で話すことも増えたし、なによりその日からできた、目の下の痣がなんとも痛々しかった。いちばん不審に思われるのは、ヨヨミミにご執心で、日を置かずにヨヨミミを指名していた、その乱暴客が、もう一切ホテルに姿を現さなくなったことだ。

「それはあまりにおかしいぜ。なんで報告しなかったんだ」とヨーマンドにこっぴどくしかられ、ジュインマは、慌てて孤児たちにもう一度ヨヨミミの自宅を調べるように指示を出した。

ジュインマは、娼婦たちを調べるにあたって、誰より一番最初にヨヨミミを調べた。けっこうな機密情報をジュインマ自身がヨヨミミに漏らしてしまっていたからだ。しかし、ヨヨミミの素行に特に問題はなかったので安心し、ここ最近はチェックしていなかったのだ。それが裏目に出た。

デンビドアの裏事情が警察にもれてしまったとなれば、ただでは済まない。証拠隠滅のためにジュインマ自身が殺されかねないのだ。

これはまずいぞ、とジュインマはかなり焦った。

## 5

孤児たちの尻を叩いて徹底的に調べさせると、乱暴客とのいざこざがあった翌日から、急にヨヨミミは引越して別の場所で暮らしていると言う事がわかった。

しかも、その引越しには、やたらと身なりの良い男たちが関わっていたという。ヨヨミミ自身が引越しを指示したのですらないのだ。

「これは本星だ」とジュインマは目の前が真っ暗になった。ヨヨミミがその死体乗っ取り捜査官で間違いないだろう。しくじった。えらいことになったぞ。姿をくまますか？

そう思った時に、また首のペンダント型の通信機が光ってヨーマンドからの連絡が入った。

「おい、お前、この女を知っているか？」

と、息せき切ってヨーマンドが3D空間に投射したのは一人の女の死体だった。あきらかにヨヨミミだ。

「あいつ、やっぱり殺されてたのか」と、ジュインマは、その決定的な画像に震えがとまらなくなった。いつ逃げる？ どこへ？ どこにも逃げられねえじゃねえか。

「おい、聞いているのか？ ぼーっとしてるんじゃないやねえぞ！」とヨーマンドのどなる声でジュインマはハッと我に返った。

「いまからそっちへ行く。そのヨヨミミとか言う女を呼び出して罠にかけるからな。呼び



その死体使いの捜査官は、かなりの格闘術の達人だという話もあったので、このフロント部屋の周りにはデンビドアの男たちが、そつと待機している。死体の側を取り押さえるのと、本体の送信所を急襲するのを、同時にやるという段取りだった。

ジュインマが心ここにあらずという態度なのを無視して、ヨヨミミが急に体を近づけて、小声で、

「だからさあ、ジューさん。あたいは、本物のあたいなんだって。分かってる？」

とささやいた。そしてそのままヨヨミミは「伏せて！」とジュインマに覆いかぶさるよりに到れこんで来た。

それが合図だったのかフロントの受付窓を突き破って誰かが飛び込んで来た。それは、死んだはずの、あの孤児だった。いや、この子供こそ死体に入ると言う腕利きの捜査官なのだろう。驚いたデンビドアの用心棒たちが、次々に発砲したがすばやく転がり、見事な体さばきで弾をよけた。

ヨヨミミのふくよかな胸に押しつぶされそうになって床にはいつくばっていたジュインマの目の前のテーブルに、痩せこけた孤児の姿の捜査官が転がり込む。かと思うと、天板の裏に張り付けられていた2本の棒を両手ではがし取った。

「え？ いつのまにこんなところに？」とジュインマは驚いた。孤児の姿でこの部屋に忍び込み、隠しておいたものだった。

孤児は、そのまま、その棒を両手に握り、テーブルの下から飛び出す。

棒をクリックすると、点滅灯が光り、先端からひも状の鞭があつと言う間に伸びた。電子麻痺機能を持つ電磁鞭だった。孤児が、軽く一閃しただけで、デンビドアの手下の男た

ちは全員。パラライズショックで床に倒れた。まだ5歳にもなっていないような姿の子供に屈強な男たちが手も出せずにいるのは、何か安物のコミックスでも見ているような不思議な光景だった。

第二陣で銃を撃ちながら飛び込んできた男たちも、照準が合うより早く床に転がった孤児の動きに翻弄され虚をつかれた。そこを休む間もなく電磁鞭の一閃が男たちの足元をかすめた。彼らもまた一瞬で身動きのできない姿になっていた。

孤児は襲ってくる人間がいなくなったのを確認すると、すつくと立ち上がり、電磁鞭に向かつて話しかけた。

「逆探知解析は成功したか？ うむ。よし。なんだと！ わかった。すぐそちらへ向かう。」

通信装置になっていた鞭二本を腰に入れると孤児はヨヨミミに向かつて話しかけた。

「ヨヨミミさん、迷惑をかけましたね」

いいえ、というようにヨヨミミは首を振った。

「おかげで、ゴノンゾ本人を確保できたようです」

それは良かったわねえ、というヨヨミミの言葉を耳にしながら、ジュインマは事の顛末がまったくわからずにポカンとしていた。ゴノンゾが捕まった？

「ジュインマさん。騙して申し訳なかった。私が、死体潜入捜査官のレビンです。すべては私たちとヨヨミミさんとの芝居です。怖い目をさせてすみませんでしたね。おかげで、デンビドアの逆探知装置からの走査信号をたどり、やつらの宇宙船を確保できました。そこにゴノンゾ本人もいたようです。ゴノンゾがいなければ、あなたが殺されることもない

でしょう。もう安心ですよ」

「どういうことだ。さっぱりわからん」とジュインマは、がたがたと震えながら、孤児の姿のレビンを見つめていた。こんな孤児が、何を偉そうに。こんな孤児が。

「政府の歳入庁の副長官が犯罪組織と結託してさまざまな情報をデンビドアをはじめいくつもの犯罪組織に流しをしていたのですよ。我々は、その尻尾を捕まえたかった。副長官が、ばれないように時折この宿で女とヨンロビを楽しんでいたという事だけがわかってましてね。そこでヨヨミミさんから重要情報が警察に漏れた、ということにしておいたのです。」

薄汚い孤児が理路整然と話している事がジュインマにはおそろしくアンバランスに感じられた。これでは何も信じられない

「あたいの死体写真、よくできてたろう？　びっくりしちやったよ」とまた朗らかにヨヨミミが笑った。

「ヨヨミミさん。あなたはこのまま死んだことにしておきます。でないと、デンビドアに報復される。故郷のルーンヨウム星にでも帰ったらどうですか？」

「うん、そうするつもりだったんだよ。もう年だしね。ジューさんと会えないのもちよつと寂しいけど」とヨヨミミは、がたがたという震えが、まだ止まらないジュインマの肩を、やさしく抱いてやった。

「ジュインマさん。あなたは、もうデンビドアとは手を切つて宿屋だけのまつとうな商売をするべきだ。あなたならできる。なんだかんだ言っても孤児に仕事を与え、慕われていたではないですか。この子の残存意識がそう言ってます。もう、孤児出身という自分の生

い立ちから、目をそらしてはダメですよ」

孤児姿のレビンが、そこにすつくと立っていた。

家族兄弟をすべて失い、たったひとりで生きてきて、見たくないものは見ないようにして四十五年生きてきたジュインマは、いま見るべきもの前で、声を立てていつまでも泣き続けた。